

東洋の思想と宗教 第三十五號 平成三十年（二〇一八）三月 抜刷

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會

袴田郁一

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會

袴田郁一

はじめに

一九六〇年代以降の六朝貴族制研究において、後漢末の政治史、なかならず黨錮の禁をいかに位置づけるかは繰り返し議論された¹⁾。川勝義雄は、儒教的な國家理念にもとづき宦官と決定的に對立した黨人が、それにより士大夫の輿論を得、やがて六朝貴族の母胎となったとした。對して増淵龍夫は、黨人の人物批評（清議）はすでに名目化しており、儒教的規範を眞に内在化させた逸民的人士の存在こそを重視すべきことを主張した。

宦官と對峙した黨人かその批判者たる逸民か。いずれによつて後漢末を見るべきかというこれらの議論に對し、吉川忠

夫は、そもそも基本史料である『後漢書』が當該時代をどのように描き出しているか、すなわち范曄の後漢末觀という側面からこの問題に取り組み、范曄がもつとも評價したのは黨人でも逸民でもなく、宦官勢力に對し就くでも就かぬでもない權道的な生き方をした人士であつたとする。そして、「范曄の歴史觀は、彼が生きた時代や社會の情況と緊密な照應關係をもっていたはずである」として、權道派が六朝貴族たちの血統上の祖であることが、范曄が權道派こそを高く評價した理由であつたとした。

吉川の提示した權道派の概念は、のちに歴史學の立場から疑問が呈されたが³⁾、それでも六朝貴族である范曄が、その社會の母胎たる後漢末期をいかに認識していたのかという問題

提起は、范曄の史學思想を検討する上できわめて重要な指摘である。筆者は考へる。本稿は、かかる吉川の研究を踏まえた上で、改めて後漢末の人士に對する范曄の敘述と評價を見、さらに『後漢紀』や『抱朴子』と比較することによってその評價の特異性を確認し、かかる范曄の歴史敘述が劉宋當時の社會狀況や國家觀を背景とすることを檢證するものである。

一・范曄と黨人

吉川によれば、范曄は黨人と逸民では黨人の方に一定の評価をするという。「逸民と黨人、そのいずれとも宦官の對極としてあらわれた、というのが范曄の認識である。しかしながら、この兩者の一方の逸民は現實をすて、一方の黨人はわが身に泥をかぶることをもいとわずに現實とたちまじわりつつ奮闘した。そして范曄が稱揚するのは、前者ではなくしてあくまで後者であった」。「やむにやまれぬ心情から「人倫一社會」の救済に身をくだいた陳蕃の姿のうちに、范曄は求道者的な崇高さを認めようとしている」と吉川は言う。

しかし吉川は范曄が黨人を全面的に評價していたともしない。「だがいかんせん、黨人派はけつきよく敗退した。……いずれも「功は終たさず」なのである」、「黨人たちの激越で

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會（袴田）

けなげな行動は、たしかに心情的な共感をよぶものではあつたけれども、當面する現實問題の處理において彼らが拙劣であつたことは否みがたいであろう」とし、さらに後述の張儉傳論を根據として、「黨人のひとりである張儉は）むしろ冷ややかに論評しさられている。他人の生命はいうにおよばず、自己の生命もけつして浪費すべきではない。犬死はむだだと范曄は力説する」と言い、范曄が眞に評價していたのは逸民でも黨人でもなく、時の權力者に對し就くでも就かぬでもない權道的な生き方をした人士、具體的には清廉を稱されながら一方で宦官との交際も厭わなかつた陳寔、逆臣董卓に仕えた荀爽・王允、曹操の第一の腹心であつた荀彧らであつたとする。そして范曄が荀彧らこそを評價した理由を、彼らがいずれも六朝時代の名門の祖先であつたことにあると指摘する。すなわち、「范曄の屬する南陽の范氏もその一員であつたところの六朝貴族社會、その淵源と典型」を六朝人が彼ら權道派に求めていたためであるとするのである。

以上の吉川の研究は示唆に富み、後述のとおり本論が據るところは非常に多い。ただ、范曄が六朝貴族の「淵源」を尊重したというのならば、血族上の祖だけではなく、その價值基準の淵源たる黨人に對しても同様に尊重しなかつたのは何

故だろうか。それほど黨人は『後漢書』で否定的に見られて
いるのであろうか。あるいは、そもそも『後漢書』において
黨人と權道派とをその評價の上で峻別できるのであるうか。
改めて范曄の彼らへの評價を見よう。

論に曰く、桓靈の世、陳蕃の徒が若きは、威能く風聲
を樹立し、昏俗に抗論す。而して峻阨の中に驅馳し、刑
人腐夫と朝を同じくして衡を争ひ、終に滅亡の禍を取る
は、彼の情志を契げ、埃霧を違く能はざるに非ざるなり。
夫の世の士の俗を離るるを以て高しと爲して、人倫をば
相恤ふる莫きを愍れめばなり。①遯世するを以て義に
非ずと爲し、故に屢々退けらるるも去らず、仁心を以て
己が任と爲し、道遠きと雖も而も彌々厲む。際會に遭ひ、
竇武と協策するに及びて、自ら萬世の一遇と謂ふなり。
慷慨乎として伊望の業なり。②功は終へざると雖も、然
れども其の信義は以て民心を搆持するに足る。漢世亂
るるも亡びざること、百餘年間なるは、數公の力なり。
〔後漢書〕列傳五十六 陳蕃傳

傍線①は、『論語』泰伯の「仁以爲己任、不亦重乎。死而後已、
不亦遠乎」を典據として、陳蕃の行動を逸民の「遯世」より
も重んじ、命を賭した義舉と見なす。さらに傍線②では、陳

蕃は宦官を除くという功績を遂げることにはなかつたが、その
信義は「民心」を引きつけ、「漢世亂るるも亡びざること、
百餘年間」となつたのは陳蕃らの力によるものに他ならない
とする。范曄は、命を投げうって漢を守護した者として陳蕃
を位置づけるのである。

一方、宦官排斥の謀が遂げられなかつたことについても、
同傳贊にて「陳蕃は蕪室にて、天綱を清むるを志す。人謀は
緝へりと雖も、幽運は未だ當たらず。言に殄瘁するを觀るに、
曷ぞ云に亡ぶに非ざらん」と評し、陳蕃の敗北は時運に巡り
合えなかつたためであり陳蕃の咎ではない、とする。

ここには、吉川が指摘するような黨人の無謀・過激さに對
する范曄の批判は讀み取れない。竇武や李膺についても同じ
く以下の資料の通りである。いずれにおいても黨人の敗北は、
「天」や「命」によるものとされる。

論に曰く、竇武・何進は元舅の資に藉り、輔政の權に據
り、内に太后の臨朝の威に倚り、外に羣英乘風の執を迎
ふるも、卒にして事闕豎に敗れ、身は死し功は積れ、
世の悲しむ所と爲る。豈に智足らずして權餘り有らん。
傳に曰く、「天の商を廢つること久し、君將に之を興さ
ん」と。斯れ宋襄公の泓に敗るるの所以なり。〔後漢書〕

列傳五十九論¹⁰

論に曰く、李膺は汗險の中より振拔し、義を蘊み風を生じて、以て流俗を鼓動せしめ、素行を激しくして以て威權を恥ぢしめ、廉尚を立てて以て貴執を振はせ、天下の士をして奮迅感慄して、波蕩して之を従はしむ。……子曰く、「道の將に廢れんとするや、命なり」と。〔後漢書〕

列傳五十七 黨錮 范滂傳論¹¹

贊に曰く、滂は涇の濁たるを以てし、玉は礫を以て貞たり。物の性既に區わかれ、嗜惡形に従ふ。蘭猶竝ぶこと無く、銷長相傾く。徒だ恨むらく、芳膏の煎灼せられ、燈の明らかなるを。〔後漢書〕列傳五十七 黨錮傳贊¹²

また注目すべきは、范曄が黨人と漢とを結びつけることにある。黨錮傳贊の傍線部は、『漢書』龔勝傳を典據として、前漢を篡奪した王莽に抵抗して餓死した龔勝に黨人をなぞらえて、彼らの死を惜しむ。陳蕃同様、李膺らも漢に殉じたこと見なされていると考えてよい。

もちろん、范曄がすべての黨人を全面的に賞賛していないことは、吉川が張儉を例に指摘する通りである。ただし、范曄が張儉傳の論において批判するのは、黨錮の禁の際に張儉が周圍を巻き込みつつ朝廷の追討から逃げ回ったことであ

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會（袴田）

る。¹³「其の經歷する所、重誅に伏する者十を以て數へ、宗親竝びに皆殄滅せられ、郡縣は之が爲に殘破す¹⁴」という事態を招いた張儉個人の行動を「冷ややかに論評」するものに過ぎない。批判對象はあくまで張儉個人の、しかも黨錮後の行動である。黨錮の禁を引き起こすに至った黨人の拙劣さを批判する事例と見ることはできない。

では吉川の言う權道的人士はどうか。

論に曰く、荀爽・鄭玄・申屠蟠俱に儒行を以て處士と爲り、累ねて徵せらるるも竝びに病と謝して詣らず。董卓の朝に當るに及び、復た禮を備へて之を召す。蟠・玄は竟に屈せずして以て其の高きを全くす。爽は已に黃髮なるも、獨り焉に至り、未だ十旬ならずして卿相を取る。意者は其の趣舎に乖くを疑ふも、余は竊かに其の情を商り、以爲へらく出處は君子の大致なりと。平運なれば則ち道を弘めて以て志を求め、陵夷なれば則ち跡を濡らして以て時を匡す。荀公の急急と自ら勵むは、其の跡を濡らすなり。然らずんば、何爲れぞ貞吉に違ひて虎の尾を履まんや。〔後漢書〕列傳五十二 荀淑傳附荀爽傳論¹⁵

ここでの荀爽は、董卓の徵召を拒んで「其の高きを全う」した鄭玄・申屠蟠との對比の上で、より高く評價される。し

かし范曄は、荀爽をその權道的處世術ゆえに評價するのではない。荀爽に時局を正さんとする自己犠牲の精神を見ることで、これこそ「陵夷」の時勢になすべき進退であると評價するのである。自己犠牲を重視する論調は、むしろ黨人に對する評價と同様であつて、荀爽を黨人と一線を引くかの如き權道の人士として評價するものではない。⁽¹⁶⁾

同様の論調は、やはり吉川が權道派の典型とする荀彧にも見ることが出来る。

論に曰く、帝を西京に遷してより、山東騰沸し、天下の命倒縣す。荀君乃ち河冀を越え、開關して以て曹氏に従ふ。其の舉措を定め、言策を立て、崇に王略を明らかにして、以て國艱に急なるを察するに、①豈に亂に因りて義を假りて、以て正に違ふの謀に就くと云はんや。

②誠に仁もて己が任と爲し、民を倉卒に紆くするを期するなり。董昭の議を阻むに及びて、以て非命を致すは、豈に數ならんや。③世の荀君を言ふ者、通塞或いは過ぐと。……④時運の屯遭に方りては、雄才に非ずんば以て其の溺るるを濟ふこと無く、功は高く執は彊ければ、則ち皇器自ら移る。此れ又時の竝ぶ可からざるなり。蓋し其の正に歸するを取るのみにして、亦た身を殺して

以て仁を成すの義なり。(『後漢書』列傳六十荀彧傳論)⁽¹⁷⁾

范曄はまず傍線①で、漢の篡奪者たる曹操に仕えた荀彧の本心は、あくまで漢を護持することにあつたとし、さらに傍線②で、陳蕃傳論にも用いられた「仁を以て己が任と爲す」によつて、荀彧のその行動を正當化する。そして③世間の荀彧論者を念頭に置いた上で、④漢が滅びたのは時勢から自然のことであつて荀彧の行爲が原因ではないこと、荀彧が曹操に與したのはやむにやまれぬ状況ゆえのこと、荀彧が曹操の魏公即位に反對して死んだのは「正に歸する」「身を殺して以て仁を成すの義」であることを主張する。自己犠牲をも厭わぬ漢への忠、それこそが荀彧の本心であるとするので、動機主義によりその擁護を圖るのである。

吉川が言う權道派は、たしかに范曄から高く評價される。そして彼らの生涯は、『後漢書』において權勢に「就くとも就かぬとも」が如く描かれている。しかしこの二點は、范曄が權道こそを評價していたことには直結しない。前掲の論贊の限りでは、あくまでその權道の生き方を動機主義から正當化しているに過ぎない。假に范曄が權道こそを眞に最上と見なしていたのならば、こうした評價にはなるまい。陳蕃ほか黨人に對する高評價と比較して明確な上下關係を見ることは

できず、むしろ黨人の自己犠牲に比すことで荀爽・荀彧の正當化を圖るほどに、彼らへの范曄の評價は絶大であった。

二・葛洪と袁宏

しかし范曄の高評價とは對照的に、歴代の黨人評價は決して芳しくない。

是の時太學生三萬餘人、皆陳蕃・李膺を推先し、其の行を被服す。是に由りて學生聲を同じくし競ひて高論を爲し、上は執政を議し、下は卿士を議す。……申屠蟠嘗て太學に遊び、退きて人に告げて曰く、「昔戰國の世、處士横議し、列國の王、争ひて擁彗先驅を爲し、卒に坑儒の禍有り。今の謂ひなり」と。乃ち跡を梁碭の間に絶ち、居ること三年にして滂難に及ぶ。（『後漢紀』卷十二 孝桓帝紀下 延熹九年¹⁹）

郭泰や蔡邕から評價されて自らも太學に遊學した申屠蟠は、黨人を支持する太學生らの過激な清議が國家からの彈壓を招くとして、その危険性を焚書坑儒になぞらえて批判し、これに同調することなく隱逸したために黨錮の禁を逃れたという。

あるいは徐幹『中論』謹交篇は、後漢末の人物評價を私利

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會（袴田）

私欲のための私的かつ恣意的な人物評價と批判するし、その『中論』を「一家の言」とした魏の文帝は、黨人が勝手な私議を繰り返したことを、名聲を求めめる者がこれに傾倒したことを宦官の跋扈と比して批判した²⁰。こうした黨人批判のなかで、東晉の葛洪『抱朴子』と袁宏『後漢紀』の激しい批判はとくに先行研究において注目される。

『抱朴子』外篇には、隨所に黨人に對する批判と思しい言説が見られ、とくに正郭篇ではその篇名の通り、黨人の清議を主導した郭泰が厳しく非難される。

人を知ると云ふと雖も、人を知るの明は、乃ち唐虞の難しとする所にして、尼父の病む所なり。夫れ明日月に並び、始を原ね終を見るを以てすら、且に猶ほ失有りて、常には中る能はざるに、況や林宗が螢燭の明に於てや。得失半解にして、已に少なからずと爲す。……林宗名は朝廷に振ひ、一時に敬はれ、三九・肉食、欽重せざる莫し。力は以て才を抜くに足り、言は以て滯より起すに足る。而れども但だ疾を京輦に養ひ、賓客を招合するのみにして、進致して、以て危蔽を匡す所無し。（『抱朴子』外篇卷四十六 正郭篇²³）

葛洪の郭泰批判は論點が多岐に渉る。この箇所での葛洪は、

郭泰にはそもそも人物評價という「唐虞の難しとする所」を行ふに足る才はなく、また陳蕃ら三公九卿に尊重される影響力を有しながら、國家のための人材を推舉してその艱難を救うことはできず、ただ賓客を招合して私黨を形成したにすぎない、とする。さらに葛洪はこれに續く段落で、同じく郭泰批判に立つ者として諸葛恪・殷伯緒・周昭の言を引き、その人物評價の空虚さ、利己性、攻撃性をも批判する。

吉川忠夫⁽²¹⁾によれば、葛洪及び三者の批判は、黨人が清議という私的な言論によつて朝政を誹謗し、士人層を扇動したことにあるという。吉川は、「郭泰たちの人物品題は、要するに、天子を頂點とする整然たる官僚機構、いわば國家的秩序の外における、民間の輿論にもとずくところのそれ自體ひとつの自律的な原理をそなえた秩序、いわば私的秩序の創造を意味している」と分析し、さらにかかる郭泰批判が「ただ一郭泰に對する攻撃であるというだけではなく、魏晉貴族の生活、ひいては魏晉貴族社會のなりたちそのものに對する攻撃でもあった」とも指摘する⁽²²⁾。

これに對し范曄においては、こうした人物評價の弊害が論じられることはない。范曄は郭泰の人物批評家としての偉大さを全面的に稱贊する。

論に曰く、莊周に言有り、人の情は山川より險しと。其の動靜は識る可きも、而も沈阻は徹らかにし難きを以ふなり。故に深厚の性、情貌に詭^ひひ、則哲の鑒、惟れ帝の難しとする所なり。而も林宗の雅俗失ふ所無く、將た其れ性を明らかにするに特に主有るか。然り而して言を遜り行を危^{たか}くし、終に時の晦きに亨^{とほ}るも、恂恂として善く導き、士をして成名を慕はしめしは、墨孟の徒と雖も、絶る能はざるなり。⁽²³⁾（後漢書 列傳五十八 郭太傳論）

堯すら困難とする人物評價（『尚書』皋陶謨）において郭泰はまったく過つことがなかったとする范曄の評價は、葛洪の理解と對極をなす。そして、「後の好事のもの、或いは附益増張し、故に華辭の不經なるもの多く、又卜相の書と類す。今其の文章として事に效らかなる者を録し、之を篇末に著す⁽²⁴⁾」と述べ、あたかも葛洪に反論するかのよう⁽²⁵⁾に、郭泰の「實像」を示すためその人物批評の實例を郭太傳に列擧するのである⁽²⁶⁾。

では袁宏の『後漢紀』はどうか。

茲より以降、主其の權を失ひ、闇豎朝に當り、佞邪位在在り。忠義の士、發憤して難を忘れて、以て邪正の道を明かにし、而して肆直の風盛んなり。……(一)猶ほ譎

詐を尙び、去就を明かにし、君臣を聞し、骨肉を疏し、天下の人をして専ら利害を俟たしむれば、弊も亦た大なり。……(二)私惠を豎て、名譽を要め、意氣に感じ、睚眦を讎とし、天下の人をして犯敘の權を輕んぜしむれば、弊も亦た大なり。……(三)同異を立て、朋黨を結び、偏學を信じ、道理を誣し、天下の人をして争競に奔走せしむれば、弊も亦た大なり。……(四)臧否を定め、是非を窮め、萬乘に觸れ、卿相を陵ぎ、天下の人をして自ら必死の地に置かしむれば、弊も亦た大なり。……①野は朝を議せず、處は務を談せず、少は長を論せず、賤は貴を辯ぜざるは、先王の教なり。傳に曰く、「其の位に在らざれば、其の政を謀らず」と。「天下に道有らば、庶人議せず」と。此れ之の謂ひなり。②苟くも斯の道を失ひ、庶人政を干し、權下に移らば、物は能くする所を競ひ、人は其の死を輕ず。亂の所以なり。乃ち夏馥の形を毀ちて以て死を免れ、袁閔の禮を滅して以て自ら全くするに至りては、豈に哀しからずや。(後漢紀)卷二十二孝桓帝紀下延熹九年²⁹)夫れ道衰ふれば則ち教虧け、幸免苟生に同じ。③教重んぜらるれば則ち道存し、身を滅ぼすとも徒死と爲らざるは、名教を固くする所以なり。汚隆は、世時

范曄「後漢書」の後漢末觀と劉宋貴族社會(袴田)

の盛衰なり。亂るるも治理は盡きず、世弊るるも教道は絶へざる所以の者は、任教の人存すればなり。夫れ誠を稱して動き、理を以て心と爲すは、此れ情の名教に存する者なり。④内に己を忘れて以て身と爲さざるは、此れ名教を利する者なり。名教に情ある者は少く、故に道は千載より深し。名教を利する者は衆く、故に道は當年に顯る。蓋し濃薄の誠は異なり、而して遠近の義は殊なるなり。體統にして觀れば、斯れ名教を利するものを取る所なり。(後漢紀)卷二十三孝靈帝紀上建寧二年³⁰)

袁宏は、「肆直の風」という黨人の清議がもたらす「弊」として(一)四の四點を挙げ、嚴しく糾弾する。これらが示す清議の恣意性や利己性、また傍線①本來すべきでない在野における朝廷誹謗という側面への批判は、ここまでに確認した葛洪らの言説と通底する。さらに袁宏はこれに加えて、朝廷誹謗の結果として②上下の秩序が失われ人が無益に競い合い死を輕んじることがようになった、と黨人の過激行動が黨錮の禁を招いたとも見なす。ゆえに袁宏にとって黨人が死に至ったことは、③④名教を輕んじこれを私利とする者たちの無駄死に過ぎなかつた。「犬死はむだだ」と力説するのは范曄ではなくむしろ袁宏であつた。

袁宏は荀彧に對する評價も嚴しい。

漢は桓靈より、君其の柄を失ひ、陵遲して振はず、亂海内を殄すも、弱弊を致して、虐民に及ばざるを以て、劉氏の澤は未だ盡きず、天下の望は未だ改まらず。故に征伐する者は漢を奉じ、爵賞を拜する者は帝を稱ふ。名器の重、未だ嘗て一日として漢に非ずんばあらず。……

劉氏の天下を失ふは、荀生之を爲すなり。始に一匡を圖るも、終に事と乖へ、情見はれ事屈し、身を容るるに所無きが若きは、則ち荀生の識不智爲るなり。生民を濟ひ、其の塗炭を振ふを取るも、百姓安んじて君位危ふく、中原定まりて社稷亡ぶが若きは、魏に於て親と雖も、漢に於て已に疏たりて、則ち荀生の功不義爲るなり。……功は當年に奮ひ、跡は千載に聞ゆも、夫の終身に流涕し、敢へて燕の徒隸を謀らざる者に異なれり。己よりして之が功を爲すも、而も己之に死す。身を殺すも猶ほ餘媿有り、焉んぞ以て名を成すに足らんや。惜いかな、名は天下を蓋ふと雖も、而も道は順に合せず、終に憂ひを以て卒し、殞さざるも義に與せず。〔後漢紀〕
卷三十 獻帝紀 建安十七年⁽²⁾

袁宏は、後漢が天下を失つたのは荀彧が曹氏の篡奪を輔け

たからに他ならないとして、荀彧の不忠を強く詰る。また荀彧が最期には曹操に死に追い込まれたことについても、己のための功を求めて曹氏を助けながら結局曹氏のために死したのであり、大いに恥ずべき不義不仁であるという⁽³⁾。

このように袁宏の黨人理解もまた范曄のそれとはまったく異なる。たとえば先述の申屠蟠の事例について、袁宏はこれを黨人の過激さを批判する逸話として採録するが、范曄は、「琛寶は懐可きも、貞期は對^あひ難し。道苟くも運に違はば、理として用て同じく廢せらる。其の遯^はく棲はんとするよりは、豈に穢を蒙るに若かん。悽悽たる碩人、阿に陵りて窮退す。明姿を韜伏し、是の堙^い暖に甘んず⁽⁴⁾」として、申屠蟠の隱逸を黨人より低く位置づける。またこの申屠蟠が荀爽の自己犠牲と比較されたことは先に見た。范曄は、黨人の過激さ、輕率さを言わない。先述の通り、范曄にとって黨人の死は漢を護持する義舉であり、荀彧はあくまでも漢の忠臣であった。

では、こうした葛洪・袁宏・范曄の評價の差異は何故生じたのか。このうち、貴族社會の批判者である葛洪が范曄と黨人觀を異にするのは理解しやすい。あるいは、范曄が黨人を評價する理由も、吉川が提示した「范曄の屬する南陽の范氏もその一員であったところの六朝貴族社會、その淵源と典型

を六朝人が後漢末期の彼らにもとめた」との理解で説明することができよう。しかしそれだけでは、范曄と同じく六朝貴族に属するはずの袁宏が黨人を評價しない理由までは説明することができず、范曄の獨自性を明らかにすることはできない。

實は袁宏と范曄は、後漢末史觀という點ではそこまで隔絶するわけではない。渡邊義浩⁽³⁵⁾によれば、袁宏の認識では、桓帝・靈帝以降の混亂期にあつても漢に對する「衆」の支持はなお失われておらず、それは漢を悼み大本を安寧にしようとする「忠賢の士」の存在ゆえに他ならず、その思いが劉備の季漢というかたちで漢の存續をもたらしただのである⁽³⁶⁾、という。前節で見た『後漢書』陳蕃傳論の歴史觀とかなり近接する。ここまで似た歴史觀を述べながら、その「忠賢の士」に對する認識では両者が大きく異なるのは何故であろうか。

三・劉宋と漢

范曄の生きた劉宋初期は、六朝時代でもとりわけ皇帝權力の強化と寒門・寒人の臺頭が起こつた時期として捉えられる。岡崎文夫⁽³⁷⁾は、劉宋一時代を貴族層迎合から寒門層優遇への轉換として見た。宮崎市定⁽³⁸⁾も、「宋齊の軍閥帝王は自尊心

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會（袴田）

の高い貴族からは滿幅の支持を得られないので、此に特殊な側近政治が始まつた。即ち側近者は貴族出身の大臣でもなく、軍功を立てた將軍でもなく、賤臣出身の才幹者が用いられた」としている。もちろん結果的には劉宋以降も貴族は依然として政治的優越を保ち續けるが、しかし范曄の生きた劉宋前半期は、新興勢力である皇帝劉氏の皇位不安定によつて貴族層・寒門層の黨争が起こるほど、貴族制は搖らいでいた⁽³⁹⁾。

こうした中で、范曄の一族である南陽の范氏はそれなりの待遇は受けた。范曄の父范泰は、晉宋革命にあたつて散騎常侍兼司空として劉裕に九錫を授與する使者となり、劉裕受命後は光祿大夫を拜命、最終的に侍中・特進・國子祭酒・領江夏王師に至り、車騎將軍を追贈された。それでも實態としては「治を爲すに拙く、故に政事の官に在るを得ず」であつたという（『宋書』卷六十范泰傳）。一方范曄は、義熙十四（四一八）年に相國掾として劉裕の幕僚となり、劉宋建國後は彭城王劉義康の冠軍參軍となり、隨府して右軍參軍、荊州別駕從事に轉じ、劉義康が司徒に遷るとその從事中郎となるなど、劉宋初期の范曄はほぼ一貫して劉義康の幕僚であつた。ところが元嘉九（四三二）年、その劉義康の母の葬儀にて挽歌を聴きながら痛飲するという不敬を犯して怒りを買ひ、宣城太

守に左遷される。この鬱々とした宣城太守時代に撰述したもののこそ、他ならぬ『後漢書』であつた。のち復歸し、元嘉十七(四四〇)年前後には始興王劉浚の後軍長史として南下邳太守を領し、幼き始興王に代わつて諸務を委ねられたという。そして元嘉十九(四四二)年に左衛將軍に遷り、翌々年には太子詹事を兼ねるに至るが、元嘉二十二(四四六)年、かつて仕えた彭城王劉義康の奉戴を畫策したとの大逆の罪により刑死する。范曄の亂である。時に四十八歳であつた。

このように父范泰は晉宋革命期の元老として遇され、また范曄も劉裕の即位前からその幕僚となり、紆餘曲折の末に文帝にその文才を認められて國政に參與した。しかし、いづれも政權の樞要を與るには至つていない。川合安は、范曄が政權擔當に積極的姿勢を示しながら文帝政權内で疎外感を深めたことを、范曄謀叛の背景として推測している。あるいは『宋書』范曄傳に、「曄素より閨庭の論議有り、朝野の知る所なり。故に門胄は華と雖も、而も國家與に姻娶せず」とあつて、范氏は一族の醜聞により皇族劉氏に婚姻を避けられていた。小尾孝夫によれば、劉宋は皇帝家の姻族に強く依存し、宗室に準ずる役割を期待していたという。范氏はその姻族に參入することを拒まれていた。范曄傳は、このことが范曄が謀議

に參加する契機であつたとする。范氏は、貴族としての政治的優位性を保證されていなかったのである。

『後漢書』は、かかる范曄の不遇時期、そして范氏を含む貴族斜陽の時代に編纂された。范曄が東晉の袁宏と異なつて、黨人という貴族の祖を擁護しなければならなかつた理由の第一はおそらくここにある。

そして理由の第二として、范曄が黨人宣揚のために漢との關係性を強調したことに注目したい。

前後の各王朝と同じく、劉宋も「古典中國」である漢を尊重した。目黒杏子は、『宋書』卷十四禮志一に記される南朝宋の南郊祭祀の儀禮次第が後漢とほぼ一致するとしており、また戸川貴行は、曹魏から劉宋にかけて南郊や宗廟儀禮などの國家儀禮が斷絶したため、劉宋を含め江南政權は後漢に關する記録の影響を受けて諸制度を整備したという。

ただし、劉宋では漢は「古典」以上の意味を持つ。受命の君劉裕が漢の末裔を稱していたためである。『宋書』武帝紀上は、劉裕は漢の高祖劉邦の弟である楚王劉交の二十二世孫であると記し、あるいは『宋書』樂志二「大會行禮歌」には、「大いなるかな皇宋、長くの祥を發す。纂系は漢に在りて、統源は唐に伊る」と唱われる箇所がある。また武帝紀論には以下

のようにある。

史臣曰く、漢氏 祀を四百に載^かね、祚を隆周に比^なべ、復た四海横潰すと雖も、而も民劉氏に繫^かけ、慄慄たる黔首、未だ遷奉の心有らず。魏武は直^ただ兵威を以て衆を服し、故に能く坐して天曆を移すも、鼎運雖^ただ改むるのみにして、而して民未だ漢を忘れず。魏室の衰孤するに及びて、怨非下に結ばる。晉は宰輔の柄を藉り、皇族の微なるに因りて、世々重權を擅にし、用て王業を基^たむ。

宋祖の受命するに至りて、義前模を越ゆ。……高祖は地桓文に非ず、衆一旅も無きも、曾浹旬ならずして、凶を夷らげ暴を翦ち、晉を祀り天に配し、舊物を失はず、内を誅し外を清め、功區宇に格^たる。鍾石聲を變じ、柴天物を改む。民の已に晉より去ること、延康の初と異にし、功の實に亂を靜むること、又咸熙の末と殊にす。

恭皇の高遜し、殆ど均しく釋負する所以なり。〔宋書〕卷三武帝紀下〕

沈約は、劉裕の史論を漢より書き起こす。漢祚は周に匹敵し、その漢が衰退して魏に禪讓してもそれは帝運が遷つただけのことで、民はなお心變わりすることなく漢を忘れなかつたとする。そして武力で衆を屈服させた魏、魏の大權を恣に

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會（袴田）

して王業を立てた晉に對し、宋は「未だ漢を忘れざる」の民心を得ることで魏より優れ、桓玄の亂を鎮壓した功績では晉に勝るといふ。ゆえに劉裕の受命は「義前模を越ゆ」なのであつた。沈約は劉裕の義の淵源を漢に求めるのである。かかる劉宋と漢の關係は、劉裕受命の際にも宣揚された。

冀州に沙門の法稱將に死なんとする有り、其の弟子たる普嚴に語りて曰く、「嵩の皇神我に告げて云ふ、「江東に劉將軍有り、是れ漢家の苗裔たりて、當に天命を受くべし。吾三十二壁・鎮金一餅を以て、將軍に與へ信と爲さん。三十二壁なるは、劉氏の卜世の數なり」と」と。普嚴以て同學の法義に告ぐ。法義十三年七月を以て、嵩高廟の石壇の下に玉壁三十二枚・黃金一餅を得る。〔宋書〕卷二十七符瑞志上〕

佛僧法義（慧義とも）が嵩山の神からの神託を聞き、劉裕にその受命を言祝ぐ三十二壁・鎮金一餅をもたらした逸話は、同時代の戴祚『西征記』にすでに見えるほか、『高僧傳』卷七釋慧義傳にもほぼ同内容で採録される。板野長八は、「慧義の見解によれば王者は佛の依囑を受けたもの、乃至は佛の子であつて、云はば佛の延長であり、且つ佛の延長たることは王者に限られてゐる。……王者は當今の如來なり（魏書釋

老志」と云ふ法果の思想に近づくもの」であるとし、またこの背景として、佛教徒に王者への禮敬を強い桓玄と異なり、劉裕が佛教と積極的に協調したことがあると指摘する。あるいは塚本善隆^④は、劉裕が佛教保護に轉じた由來のひとつとして、この慧義による「漢高祖の子孫である劉裕こそは天命をうけて天子たる人であることを證明する神授の金壁を求めるといふ、いわゆる禪讓革命を進める爲の一芝居」を擧げる。兩者が指摘する通り、これは明らかに佛教からの劉裕正統化運動であるが、その正統性の根據として劉裕が「漢家の苗裔」であることが擧げられていることは注目すべきである。

さらにこの瑞祥は佛教だけでなく道教にも利用された。劉氏の胤、有道の體なり。絶へて更に續ぎ、天授けて圖に應ず。中嶽の靈瑞は、二十二壁、黃金一民、以て本姓を證す。九尾の狐至り、靈寶世に出で、甘露庭に降り、三角の牛到り、六鍾靈形、巨獸雙象、人中に來儀して食らふ。房廟の祇、一に皆罷廢し、正を治むるに道を以てし、故氣を蕩除すること、此れ豈に太上の信に非ざらんや。宋帝劉氏は是れ漢の苗胄なりて、恆に道と與に縁を結ぶ。宋國の道有ること多し。(『三天内解經』卷上(sn1205))

劉宋初期の成立とされる『三天内解經』では、以上のよう
に劉裕の受命を表す瑞祥が列擧されているが、そのひとつに「二十二壁、黃金一民」という件の中嶽(嵩山)の靈瑞があり、またこちらでも劉裕の系統がその正統性のひとつとして示されている。小林正美^⑤は、道教から劉裕贊美がなされた理由として、孫恩・盧循の亂平定により臺頭した劉裕の即位を受け、天師道教徒が危機感を抱いたこと、劉宋の庇護を受け隆盛した大乘佛教に對抗する心が芽生えたことを擧げる。この様に、同時代の佛教・道教が劉宋の受命を正統化せんと圖る中で、いずれの事例でも劉裕が漢の末裔たることが明確に示されていることは、劉裕自身がその正統性の根源を漢に求めていたことを物語る。

こうした時代の中で、范曄は黨人を漢と結びつけることでその宣揚を圖つたのであった。

おわりに

范曄は、黨人が宦官と對決したことを漢に殉じる行爲とし、それにより民は漢を慕う心を失わず、漢の滅亡が引き伸ばされたと見なした。あるいは漢の破壊者董卓・曹操に與した荀爽・荀彧を擁護をして兩者の本心があくまで漢の存続にあつ

たことを主張し、また漢の滅亡は必然であつてその咎が荀彧にないことを強調した。それはつまり黨人が漢に忠であつたことと同様に、その裔たる六朝貴族が漢の裔たる劉宋を輔弼するに足ること、さらには貴族とはそうあるべき存在であることの表現ではないか。

こうした歴史観は范曄ひとりに留まらない。同時代の裴松之は『三國志』注において、荀彧が曹操を佐けたのは漢を護持するための權宜の策であり、それによつて漢は命脈を延長させたと評し、荀彧が漢祚を傾けたとする世の論者に反駁した。⁽³⁾ 范曄と軌を一にする荀彧論である。あるいは『世說新語』は、渡邊義浩によれば當該時代における貴族のあり方を總括することを目指した書であるというが、氏は「劉宋でも貴族制を繼續していくために貴族のあり方を規定する書となることを目指すことの一環として、「劉家を守ろうとした後漢末の「名士」たちに、『世說新語』は、劉宋の貴族を重ねた」と指摘している。

范曄は『後漢書』の史論を通して、同時代における國家に對する貴族の價値を問い直したのである。

范曄 『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會（袴田）

- (1) 川勝義雄『六朝貴族制社會の研究』（岩波書店、一九八二年）、増淵龍夫『中國古代の社會と國家』（岩波書店、一九九六年）、矢野主税『門閥社會成立史』（國書刊行會、一九七六年）、多田狷介『漢魏晉史の研究』（汲古書院、一九九九年）、渡邊義浩『後漢國家の支配と儒教』（雄山閣出版、一九九五年）を参照。
- (2) 吉川忠夫『范曄と後漢末期』（『古代學』一三・三・四、一九六七年。同氏『六朝精神史研究』（同朋社、一九八四年）所收。
- (3) 渡邊義浩『後漢時代の黨錮について』（『史叢』六、一九九一年。前掲『後漢國家の支配と儒教』所收、西川利文『胡廣傳覺書 黨錮事件理解の前提として』（『佛教大學文學部論集』八二、一九九八年）を参照。
- (4) また安部聰一郎も、『後漢書』に見られる「三君八俊」などの「名士の番付」の歴史的變遷や『後漢書』郭太傳の研究を通して、『後漢書』の背景となつた六朝貴族の自己認識や王朝の正統問題を課題として擧げている。詳細は安部聰一郎『黨錮の「名士」再考——貴族制成立過程の再検討のために』（『史學雜誌』一一一・一〇、二〇〇二年）、安部聰一郎『後漢書』郭太列傳の構成過程 人物批評家としての郭泰像の成立』（『金澤大學文學部論集 史學・考古學・地理學篇』二八、二〇〇八年）を参照。
- (5) 『後漢書』の敘述から范曄獨特の歴史觀を見出し、その背景を范曄が生きた當時に求めるといふ方法論は、近年發表さ

れた渡邊將智の研究にも通じ、第一節で詳述する吉川忠夫の研究とともに本稿が據るところは大きい。渡邊は、范曄が後漢和帝期以降の政局を「帝位の正統な繼承に盡力した人物」と「帝位の非正統な繼承を企圖した人物」の對立という構圖で見えており、その背景に時の輔政である劉義康とその與黨である寒門・寒人層への批判があるとした。渡邊將智「范曄」後漢書」の人物評價と後漢中後期の政治過程」（『古代文化』六

九—一、二〇—一七）を参照。

(6) 黨人が文化的・價值基準的な意味において貴族の祖と見なしうることは、堀敏一「九品中正制度の成立をめぐって—魏晉の貴族制社會にかんする一考察」（『東洋文化研究所紀要』四五、一九六八年）を参照。

(7) 「論曰、桓靈之世、若陳蕃之徒、咸能樹立風聲、抗論愾俗。而驅馳險阨之中、與刑人腐夫同朝爭衡、終取滅亡之禍者、彼非不能契情志、違埃霧也。愍夫世士以離俗爲高、而人倫莫相恤也。以遯世爲非義、故屢退而不去、以仁心爲己任、雖道遠而彌厲。及遭際會、協策竇武、自謂萬世一遇也。懷懷乎伊望之業矣。功雖不終、然其信義足以攜持民心。漢世亂而不亡、百餘年間、數公之力也。」

(8) 漢が滅亡に瀕しながらなお陳蕃たち忠良により命數を長らえさせたとする歴史認識は、『後漢書』桓帝紀論や列傳五十一論にも見ることができ、『後漢書』はその成立事情のために表現されることすべてが范曄の認識であったと即斷する

ことが難しい。しかし他卷の論贊でも同様の理解が見られることは、これを范曄の認識と見なすことに一定の妥當性を與えよう。

(9) 「陳蕃蕪室、志清天綱。人謀雖緝、幽運未當。言觀瘵瘵、曷非云亡」（『後漢書』列傳五十六贊）。

(10) 「論曰、竇武・何進藉元舅之資、據輔政之權、內倚太后臨朝之威、外迎羣英乘風之執、卒而事敗闕豎、身死功積、爲世所悲。豈智不足而權有餘乎。傳曰、天之廢商久矣、君將興之。斯宋襄公所以敗於泓也。」

(11) 「論曰、李膺振拔汗險之中、蘊義生風、以鼓動流俗、激素行以恥威權、立廉尙以振貴執、使天下之士奮迅感嘆、波蕩而從之。……子曰、道之將廢也與、命也。」

(12) 「贊曰、渭以涇濁、玉以礫貞。物性既區、嗜惡從形。蘭猶無竝、銷長相傾。徒恨、芳膏煎灼燈明。」

(13) 「後漢書」列傳五十七 黨錮 張儉傳に、「論曰、昔魏齊遠死虞卿解印、季布逃亡朱家甘罪。而張儉見怒時主、顛沛假命。天下聞其風者、莫不憐其壯志、而爭爲之主。至乃捐城委爵、破族屠身、蓋數十百所。豈不賢哉。然儉以區區一掌、而欲獨埋江河、終嬰疾甚之亂。多見其不知量也」とある。

(14) 「其所經歷、伏重誅者以十數、宗親竝皆殄滅、郡縣爲之殘破」（『後漢書』列傳五十七 黨錮 張儉傳）。

(15) 「論曰、荀爽・鄭玄・申屠蟠俱以儒行爲處士、累徵竝謝病不詣。及董卓當朝、復備禮召之。蟠・玄竟不屈以全其高。爽已黃髮矣、

獨至焉、未十旬而取卿相。意者疑其乖趣舍、余竊商其情、以爲出處君子之大致也。平運則弘道以求志、陵夷則濡跡以匡時。荀公之急急自勵、其濡跡乎。不然、何爲違貞吉而履虎尾焉。

(16) なお、ここで引き合いに出される鄭玄を范曄が尊重していたことは、吉川忠夫訓注『後漢書 第一冊』(岩波書店、二〇〇一年)の解題で指摘される。范曄の祖父范寧の學問は、鄭玄の學統を汲む。范曄はその鄭玄を比較對象にしてまで、荀爽の自己犠牲を高く評價したのである。吉川忠夫「范寧の生活と學問」(『東洋史研究』二五―四、一九六七年。前掲『六朝精神史研究』所收)も参照。

(17) 「論曰、自遷帝西京、山東騰沸、天下之命倒懸矣。荀君乃越河冀、開關以從曹氏。察其定舉措、立言策、崇明王略、以急國艱、豈云因亂假義、以就違正之謀乎。誠仁爲己任、期紓民於倉卒也。及阻董昭之議、以致非命、豈數也夫。世言荀君者、通塞或過矣。……方時運之屯遭、非雄才無以濟其溺、功高執彊、則皇器自移矣。此又時之不可竝也。蓋取其歸正而已、亦殺身以成仁之義也」。

(18) 「言或本心不背漢也」(『後漢書』列傳六十荀彧傳 李賢注)。
(19) 「是時太學生三萬餘人、皆推先陳蕃・李膺、被服其行。由是學生同聲競爲高論、上議執政、下議卿士。……申屠蟠嘗游太學、退而告人曰、昔戰國之世、處士橫議、列國之王、爭爲擁護先驅、卒有坑儒之禍。今之謂矣。乃絕跡於梁碭之間、居三年而滂及難」。

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會(袴田)

(20) 「由此觀之、不務交游者、非政之惡也。心存於職業而不違也。……及夫古之賢者亦然、則何爲其不獲賢交哉。非有釋王事、廢交業、遊遠邦、曠年歲者也。故古之交也近、今之交也遠。古之交也寡、今之交也衆。古之交也爲求賢、今之交也爲名利而已矣。……桓靈之世其甚者也。自公卿大夫、州牧郡守、王事不恤、賓客爲務。……詳察其爲也、非欲憂國恤民、謀道講德也。徒營己治私、求勢逐利而已」(『中論』讜交第十二)。
ほか『中論』における清議批判については、増淵龍夫「後漢黨錮事件の史評について」(『橋論叢』四四―六、一九六〇年。前掲『中國古代の社會と國家』所收)、和久希「徐幹の經學」(『大道の中』をめぐって)、『中國文化』六六、二〇〇八年。同氏「六朝言語思想史研究」(汲古書院、二〇一七年)所收、渡邊義浩「曹丕の『典論』と政治規範」(『三國志研究』四、二〇〇九年。同氏「古典中國」における文學と儒教」(汲古書院、二〇一五年)所收)などの研究がある。

(21) 「序云、佞邪穢政、愛惡敗俗。國有此二事、欲不危亡、不可得也」、「桓靈之際、闕寺專命于上、布衣橫議于下。干祿者彈貨以奉貴、要名者傾身以事勢。位成乎私門、名定乎橫巷。由是戶異議、人殊論。論無常檢、事無定價。長愛惡、興朋黨」(『意林』引『典論』)。

(22) 具體的には崇教篇、名實篇、刺驕篇、漢過篇、自序などにそれを見ることができ、たとえば自序では、後漢末の黨人の清議が門閥を形成するに至ったこと、許劭らの人物評價

に定論がなかつたことなどが批判に擧がっている。こうした人物評價の分裂性への批判は、前掲の渡邊義浩（一九九二）が指摘するとおり先述の徐幹・曹丕にも見ることができ。

(23) 「雖云知人、知人之明、乃唐虞之所難、尼父之所病。夫以明竝日月、原始見終、且猶有失、不能常中、況於林宗螢燭之明、得失半解、已爲不少矣。……林宗名振於朝廷、敬於一時、三九・肉食、莫不欽重。力足以拔才、言足以起滯。而但養疾京輦、招合賓客、無所進致、以匡危蔽。」

(24) 吉川忠夫「抱朴子の世界（上）」（『史林』四七一五、一九六七年）。

(25) 吉川はこの批判の背景に、嚴然たる君主権力の存在を求める葛洪の理念を考える。その點では、君主として黨人の私性を批判した曹丕と葛洪は姿勢を一にすると言える。また渡邊義浩は、葛洪が擧げる先人がいづれも孫吳人士であったことを踏まえ、正郭篇・漢過篇に示された後漢末批判を、「西晉末期の察舉に對する葛洪の、さらには江東全體の不滿の假託と考えてよい」としている。渡邊義浩「『抱朴子』の歴史認識と王導の江東政策」（『東洋文化研究所紀要』一六六、二〇一四年）を参照。

(26) 「論曰、莊周有言、人情險於山川。以其動靜可識、而沈阻難徵。故深厚之性、詭於情貌、則哲之鑒、惟帝所難。而林宗雅俗無所失、將其明性特有主乎。然而遜言危行、終享時晦、恂恂善導、使士慕成名、雖墨孟之徒、不能絕也。」

(27) 「後之好事、或附益增張、故多華辭不經、又類下相之書。今錄其章章效於事者、著之篇末」（『後漢書』列傳五十八郭太傳）。

(28) 後漢末からの范曄までの郭泰評價の變遷に關しては、前掲の安部「後漢書」郭太列傳の構成過程 人物批評家としての郭泰像の成立」を参照。安部によれば、范曄は郭泰の様々な側面のうち人物批評家としての郭泰像をより強く重視しているという。

(29) 「自茲以降、主失其權、闔豎當朝、佞邪在位。忠義之士、發憤忘難、以明邪正之道、而肆直之風盛矣。……猶尙譎詐、明去就、聞君臣、疏骨肉、使天下之人專俟利害、弊亦大矣。……豎私惠、要名譽、感意氣、讎睚眦、使天下之人輕犯敘之權、弊亦大矣。……立同異、結朋黨、信偏學、誣道理、使天下之人奔走爭競、弊亦大矣。……定臧否、窮是非、觸萬乘、陵卿相、使天下之人自置於必死之地、弊亦大矣。……野不讓朝、處不談務、少不論長、賤不辯貴、先王之教也。傳曰、不在其位、不謀其政。天下有道、庶人不讓。此之謂矣。苟失斯道、庶人干政、權移於下、物競所能、人輕其死。所以亂也。至乃夏馥毀形以免死、袁閔滅禮以自全、豈不哀哉。」

(30) 「夫道衰則教虧、幸免同乎苟生。教重則道存、滅身不爲徒死、所以固名教也。汚隆者、世時之盛衰也。所以亂而治理不盡、世弊而教道不絕者、任教之人存也。夫稱誠而動、以理爲心、此情存乎名教者也。內不忘己以爲身、此利名教者也。情於名

教者少、故道深於千載。利名教者衆、故道顯於當年。蓋濃薄之誠異、而遠近之義殊也。體統而觀、斯利名教之所取也」。

- (31) ただし、袁宏は葛洪と異なり清議そのものは強く否定せず、その弊害と併記して本来備えるべき有効性も挙げる。葛洪が黨人の清議批判に魏晉期の清談批判を假託したことと異なり、袁宏は清談亡國論否定論者であった。袁宏による清談擁護論については、松浦崇「袁宏『名士傳』と戴逵『竹林七賢論』」(『中國文學論集』六、一九七七年)を参照。

- (32) 「漢自桓靈、君失其柄、陵遲不振、亂殄海內、以弱致弊、虐不及民、劉氏之澤未盡、天下之望未改。故征伐者奉漢、拜爵賞者稱帝。名器之重、未嘗一日非漢。……劉氏之失天下、荀生爲之也。若始圖一匡、終與事乖、情見事屈、容身無所、則荀生之識爲不智矣。若取濟生民、振其塗炭、百姓安而君位危、中原定而社稷亡、於魏雖親、於漢已疏、則荀生之功爲不義也。……功奮於當年、跡聞於千載、異夫終身流涕、不敢謀燕之徒隸者。自己爲之功、而已死之。殺身猶有餘媿、焉足以成名也。惜哉、雖名蓋天下、而道不合順、終以憂卒、不殞不與義」。

- (33) 中林史朗は、袁宏が黨人批判などを通じて名教のあるべき姿を強く提示する理由を、郷黨社會における郷論の興望が貴族の存立基盤であったためとする。「彼らは名門であるが故にこそ、理念的にはあくまで名教に基づく名教の徒であらねばならなかった」という。中林史朗「袁宏管見 政治的動靜と『後漢紀』」(『大東文化大學漢學會誌』三三二、一九九三年)。

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會(袴田)

同氏『中國中世四川地方史論集』(勉誠出版、二〇一五年)所收を参照。

- (34) 「贊曰、琛寶可懷、貞期難對。道苟違運、理用同廢。與其迴棲、豈若蒙穢。悽悽碩人、陵阿窮退。韜伏明姿、甘是堙暖」(『後漢書』列傳四十三)。

- (35) 渡邊義浩「東晉における史評の隆盛と袁宏の『後漢紀』」(『中國文化』研究と教育)七五、二〇一七年)。

- (36) 季漢によつて漢が命脈を保つたという認識は、これも范曄に見ることができると可能性がある。范曄は陳蕃傳論で「漢世亂るるも亡びざること、百餘年間」と述べたが、陳蕃の敗死(一六八年)からは百餘年後、炎興元(二六三年)に季漢は滅亡した。ここで言う「百餘年間」には季漢の四十三年も含むと見てよい。なお范曄の三國觀については、田中靖彦「後漢書 荀彧傳について―『三國志』との比較を中心に」(『惠泉女學園大學紀要』二四、二〇一二年。同氏「中國知識人の三國志像」(研文出版、二〇一五年)所收)を参照。

- (37) 岡崎文夫『魏晉南朝通史』(弘文堂、一九三三年)。

- (38) 宮崎市定「九品官人法の研究 科擧前史」(中央公論社、一九九七年)。

- (39) ほか劉宋の政治史については、越智重明「魏晉南朝の政治と社會」(吉川弘文館、一九六三年)、同氏「魏晉南朝の貴族制」(研文出版、一九八二年)、宮川尙志「六朝史研究 政治・社會篇」(平樂寺書店、一九六四年)、安田二郎「六朝政治史

- の研究」(京都大學學術出版會、二〇〇三年)、中村圭爾『六朝政治社會史研究』(汲古書院、二〇一三年)、川合安『南朝貴族制研究』(汲古書院、二〇一五年)などを参照。
- (40) より詳しい范曄の生涯は、吉川忠夫『史家范曄の謀叛』(『歴史と人物』一四一四、一九八四年)を参照。
- (41) 川合安『元嘉時代後半の文帝親政について―南朝皇帝權力と寒門・寒人』(『集刊東洋學』四九、一九八三年。前掲『南朝貴族制研究』所収)。
- (42) 小尾孝夫『劉宋前期における政治構造と皇帝家の姻族・婚姻關係』(『歴史』一〇〇、二〇〇三年)。
- (43) 渡邊義浩は、後漢の章帝期に白虎觀會議により定められた中國の古典的國制が、その統治制度・世界觀・支配を正統化する儒教の經義とともに、後漢の滅亡以降も各王朝に規範として繼承され續けるとし、かかる概念を「古典中國」と稱した。渡邊義浩『古典中國』の形成と王莽』(『中國―社會と文化』二六、二〇一一年)を参照。
- (44) 目黒杏子『後漢郊祀制と『元始故事』』(九州大學東洋史論集)三六、二〇〇八年)。
- (45) 戸川貴行『東晉南朝における建康の中心化和國家儀禮の整備について』(『七隈史學』一三、二〇一一年。同氏『東晉南朝における傳統の創造』(汲古書院、二〇一五年)所収)。
- (46) 「史臣曰、漢氏載祀四百、比祚隆周、雖復四海橫潰、而民繫劉氏、慄慄黔首、未有遷奉之心。魏武直以兵威服衆、故能坐移天曆、鼎運雖改、而民未忘漢。及魏室衰孤、怨非結下。晉藉宰輔之柄、因皇族之微、世擅重權、用基王業。至於宋祖受命、義越前模。……高祖地非桓文、衆無一旅、曾不浹旬、夷凶翦暴、祀晉配天、不失舊物、誅內清外、功格區宇。至於鍾石變聲、柴天改物、民已去晉、異於延康之初、功實靜亂、又殊咸熙之末。所以恭皇高遜、殆均釋負」。
- (47) 「冀州有沙門法稱將死、語其弟子普嚴曰、嵩皇神告我云、江東有劉將軍、是漢家苗裔、當受天命。吾以三十二壁・鎮金一餅、與將軍爲信。三十二壁者、劉氏卜世之數也。普嚴以告同學法義。法義以十三年七月、於嵩高廟石壇下得玉璧三十二枚・黃金一餅」。
- (48) 「戴延之西征記曰、……冀州博陵郡王次寺道人法稱、告其弟子普嚴曰、嵩高皇帝語吾言、江東有劉將軍、是漢家苗裔、受天命。吾以三十二壁・金一餅與之。壁數是劉氏卜世之數也。惠義以義熙十三年入嵩高山、即得璧金獻焉」(『藝文類聚』卷八十四寶玉部下)。
- (49) 板野長八『劉裕受命の佛教的祥瑞』(『東方學報』東京一一一、一九四〇年)。
- (50) 塚本善隆『南朝「元嘉治世」の佛教興隆について』(『東洋史研究』二二、一九六四年)。
- (51) 「劉氏之胤、有道之體。絕而更續、天授應圖。中嶽靈瑞、二十二壁、黃金一民、以證本姓。九尾狐至、靈寶出世、甘露降庭、三角牛到、六鍾靈形、巨獸雙象、來儀人中、而食房廟

之祇、一皆罷廢、治正以道、蕩除故氣、此豈非太上之信乎。
宋帝劉氏は漢之苗胄、恆使與道結緣。宋國有道多矣」。

(52) 小林正美『六朝道教史研究』（創文社、一九九〇年）第二編序章。

(53) 「世之論者多譏、或協規魏氏、以傾漢祚、君臣易位、實或之由。雖晚節立異、無救運移。功既違義、識亦疚焉。……臣松之以爲、斯言之作、誠未得其遠大者也。或豈不知魏武之志氣、非衰漢之貞臣哉。良以于時王道既微、橫流已極、雄豪虎視、人懷異心、不有撥亂之資、仗順之略、則漢室之亡忽諸、黔首之類殄矣。……蒼生蒙舟航之接、劉宗延二紀之祚、豈非苟生之本圖、仁恕之遠致乎。及至霸業既隆、翦漢迹著、然後亡身殉節、以申素情、全大正於當年、布誠心於百代。可謂任重道遠、志行義立」(『三國志』卷十評裴松之注)。

(54) 渡邊義浩『世說新語』の編集意圖(『東洋文化研究所紀要』一七〇、二〇一六年。同氏『古典中國』における小説と儒教(汲古書院、二〇一七年)所收)

〈キーワード〉黨錮の禁、『後漢書』、貴族制

范曄『後漢書』の後漢末觀と劉宋貴族社會(袴田)